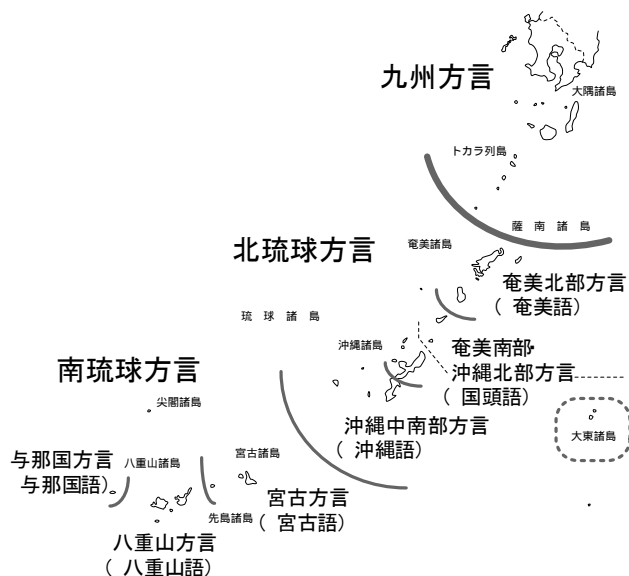
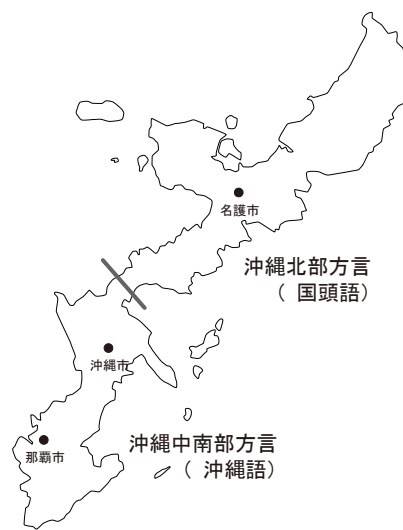


## 沖縄県那覇市首里方言



琉球方言区画図



沖縄本島方言区画図

【沖縄県の方言区画】沖縄県は多くの島によって構成された島嶼県であり、島ごとに異なる言語が使用されている。また、鹿児島県の一部である奄美諸島も1609年以前は琉球国の領土であったため、400年以上経過した現在でも沖縄県と同系統の言語が用いられている。このため、奄美大島から与那国島にいたる島々で用いられている伝統的な言語の総称として「琉球語」、「琉球諸語」、「琉球方言」、「奄美・沖縄方言」などが用いられている（本稿では「琉球方言」とする）。

琉球方言の方言区画は 奄美北部方言、奄美南部および沖縄北部方言、沖縄中南部方言、宮古方言、八重山方言、与那国方言の6つに下位区分される。なお、明治時代に八丈島と沖縄各地から移植した南・北大東島は様々な方言が入り交じった方言なので、本稿では方言区画から外すことにする。

琉球方言の方言区画のなかで、最も言語差が大きいのは沖縄本島と宮古島の間である。このため、

を「北琉球方言」、を「南琉球方言」にまとめることができる。

【首里方言について】首里方言は「沖縄中南部方言」の代表的な方言の一つである。以下のような特徴がみられる。

母音は / a i u e o / の5種類である。同じ「北琉球方言」の奄美方言のような / i / は認められない。

首里方言の子音音素として特徴的なのが声門閉鎖音 / ʔ / である。特に目立つのが半母音や撥音の前に立つときであり、以下のような区別があるため、 / ʔ / には弁別機能が認められ、音素と認定できる。

ワー [wa:] (私の) : ッワー [ʔwa:] (豚)

ヤー [ja:] (家) : ッヤー [ʔja:] (お前)

ンニ [nɲi] (胸) : ッンニ [ʔnɲi] (稲)

また、ア行音には基本的に / ʔ / があってヤ行、ワ行と区別されるため、ア行イ段 [ʔi] とヤ行イ段の [ji ~ i]、ア行ウ段 [ʔu] とワ行ウ段 [wu ~ u] で以下のような対立がみられる。

イン [ʔin] (犬) : ィイン [jin] (縁)

ウトウ [ʔutu] (音) : ッウトウ [wutu] (夫)

なお、沖縄本島でも北部方言や中南部方言の一部の地域（糸満、久米島方言など）では、このような声門閉鎖音による対立がみられない。

首里方言の動詞には、西日本方言の進行相（「書きおる、降りよる」など）と同様に連用形に対応する語形に ッウン（いる）が付いているが、存在動詞アン（有る）、ウウン（いる）には付いていない。ただし、名護市史編さん委員会・名護市史『言語』編専

門部会(2006:584)によれば、沖縄中部の一部(恩納村) 沖縄北部の多くの方言で「有り」に「居る」が下接し、アユンやアインとなっている。

なお、ムチュン(持つ) ンージュン(見る) チューン(来る) アン(有る)など断定非過去形などの語尾の出自については、「む」説、「も」説、「もの」説などがある。これらのうち、「む」説を支持する研究が比較的多いが、日本古典語の「む」と琉球方言の断定非過去形の語尾「ン」では接続の違いがあるため、まだ定説になり得ていない。

なお、上村・須山(1997:445-446)によれば、奄美・名瀬方言では断定非過去形「振る」に相当する動詞が「hurjuri」と「hurjun」の2種類あり、区別されているようであるが、首里方言では前者にあたる語形(「振りおり」に対応)がみられない。

また、中止形として\*/mocji ari/に対応する「ムチャーニ」と\*/mocji te/に対応する「ムッチ」がある(宮古、八重山、与那国方言には後者はみられない)。

型の「乗る」<sub>ム</sub> 型の「着る」<sub>ム</sub>「起きる」<sub>ム</sub>「蹴る」など現代日本語で断定非過去形の語尾が「～る」になる動詞は、首里方言では「～ユン」と「～イン」両方の語形を聞くことができる。「～ユン」が古く、「～イン」が新しい形である。現在の80～90歳の高齢者のなかに「～ユン」と発音する人はほとんどいない。「～イン」の方が優勢である。

- ・チン チューン。(着物を 着る)
- ・ハチジに ウキーン。(8時に 起きる)

ただし、他の方言では「～ユン」の方言を現在も使用している(例えば久米島真謝方言では「ニユン(煮る)」「チユン(切る)」)。

なお、首里方言のサ変動詞「スン」は、国立国語研究所(1963)では「sjun」のように拗音であるが現在は直音化し、「スン」と発音している。

首里方言の形容詞の断定非過去形は、アカサン(赤い)、ナガサン(長い)、ツンプサン(重い)などのように形状、状態などを表すものとウッサン(嬉しい)、サピッサン(寂しい)、ミジラサン(珍しい)などのように心情を表すものがあり、後者の語尾は古くは「～シャン」であったという(国立国語研究所1963)しかし、現在はどちらの語尾も「～サン」となっている。この断定非過去形は、形容詞の語幹

に「さ」と「有る」に対応する「アン」が結びついたものである。名護市史編さん委員会・名護市史『言語』編専門部会(2006:582)によれば、伊江島方言では「高い」を「タカサ アン」、「恥ずかしい」を「パズィカーシャ アン」のように「有る」が融合しないという。

【表記について】首里方言の表記は、表音式カタカナを文字として採用する。本稿では西岡・仲原(2006[2000]:192-193)を一部修正し、以下のように表記する。

/ʔa/=ア、/ʔi/=イ、/ʔu/=ウ、/ʔe/=エ、/ʔo/=オ、  
/ʔwa/=ワ、/ʔwi/=ウィ、/ʔwe/=ウェ、/ʔja/=ジャ  
/ʔN/=ン、/ʔu/=ウ、/ʔi/=イ、/ʔN/=ン

【調査概要】本稿の記述で引用元を記していない用例は、那覇市首里で生育し、調査時も居住する話者(大正12年、昭和7年、昭和15年生まれ)への聞き取り調査に基づいている。昭和15年生まれの話者が首里儀保町の出身であり、他の2人は首里鳥堀町、汀良町の出身である。両者は母音の長短で異なる場合があり、「見る」を前者が「ンジュン」、後者が「ンージュン」という(国立国語研究所1963では「ンージュン」)。首里儀保町は、他の単語の長音、例えば「サーターアングギー」(儀保)と「サーターアングギー」(首里のその他の地域)でも同様の違いがみられる。本稿では両者をまとめて「ン(-)ジュン」と示す。

なお、上記の話者の他、首里で生育した話者2人(昭和12年生まれ)にも用例を確認してもらった。このほか、用例には首里の自然談話文字化資料、辞書、教科書等から引用したのも含まれている(用例出典参照。引用に際し、音声記号や音韻記号、漢字仮名交じり文をカタカナ表記に改め、「<sub>ム</sub>」「<sub>ン</sub>」などの補助記号を付したのもある)。

沖縄県那覇市首里方言の活用表

《動詞》

活用形		類別			
		a類 持つ	b類 見る	来る	する
終 止 類	断定非過去	ムチュン	ン(-)ジュン	チューン	スン
	断定過去	ムッチャン	ン(-)ジャン	チャン	サン
		ムチュタン	ン(-)ジュタン	チュータン	スタン
	命令	ムテー	ン(-)デー	クーワ	シェー
		ムティ(ヨー)	ン(-)ディ(ヨー)	クー(ヨー)	シ(ヨー)
	禁止	ムトゥナ(ケー)	ン(-)ジュナ(ケー)	クーンナ	スナ
		ムタンケー	ン(-)ダンケー	クーンケー	サンケー
	意志	ムタ	ン(-)ダ	クー	サ
	推量	ムチュルハジ	ン(-)ジュルハジ	チュールハジ	スルハジ
ムチュラハジ 〔ガ〕ムチュラ		ン(-)ジュラハジ 〔ガ〕ン(-)ジュラ	チューラ 〔ガ〕チューラ	スラハジ 〔ガ〕スラ	
強調	〔ドゥ〕ムチュル	〔ドゥ〕ン(-)ジュル	〔ドゥ〕チュール	〔ドゥ〕スル	
疑問	ムチュミ	ン(-)ジュミ	チューミ	スミ	
過去疑問	ムッチー	ン(-)ジー	チー	シー	
接 続 類	連体非過去	ムチュル	ン(-)ジュル	チュール	スル
	連体過去	ムッチャル	ン(-)ジャル	チャール	サル
		ムチュタル	ン(-)ジュタル	チュータル	スタル
	中止	ムチ	ン(-)ジ	チー	シー
		ムチャーニ	ン(-)ジャーニ	チャーニ	サーニ
ムッチ		ミー	ッチ	ッシ	
仮定	ムテー	ン(-)デー	クーレー	シェー	
	ムチャーネー ムター	ン(-)ジーネー ン(-)ダー	チャーネー クーラー	シーネー サワー	
理由	ムチュクトゥ	ン(-)ジュクトゥ	チュークトゥ	スクトゥ	
派 生 類	否定	ムタン	ン(-)ダン	クーン	サン
	丁寧	ムチャビーン	ン(-)ジャビーン	チャビーン	サビーン
	使役	ムタスン	ン(-)ダスン	クーラスン	《シミーン》
		ムタシミーン	ン(-)ダシミーン ミシーン	クーラシミーン	
	受身	ムタリーン	ン(-)ダリーン	クーラリーン	サリーン
	可能	ムチユースン	ン(-)ジュースン	チーユースン	シーユースン
		ムタリーン	ン(-)ダリーン	クーラリーン	
	尊敬	ムチミシェーン	ン(-)ジミシェーン 《ウミカキミシェーン》	《ッメンシェーン》	シミシェーン
	継続	ムッチョーン	ン(-)ジョーン	チョーン	ソーン
		ムッチェーン	ン(-)ジェーン	チェーン	シェーン
希望	ムチブサン	ン(-)ジブサン	チーブサン	シーブサン	
のだ	ムチュンテー ムチドゥ スル	ン(-)ジュンテー ン(-)ジドゥ スル	チューンテー チードゥ スル	スンテー シードゥ スル	

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

		赤い	静か(だ)	大学生(だ)
終 止 類	断定非過去	アカサン	シジカヤン	ダイガクシーヤン
	断定過去	アカサタン	シジカヤタン	ダイガクシーヤタン
	推量	アカサルハジ 〔ガ〕 アカサラ	シジカヤルハジ 〔ガ〕 シジカヤラ	ダイガクシーヤルハジ 〔ガ〕 ダイガクシーヤラ
	強調	〔ドゥ〕 アカサル	〔ドゥ〕 シジカヤル	〔ドゥ〕 ダイガクシーヤル
	疑問	アカサミ	シジカヤミ	ダイガクシーヤミ
接 続 類	連体非過去	アカサル	シジカナ	《ダイガクシーヌ》
	連体過去	アカサタル	シジカヤタル	ダイガクシーヤタル
	中止	アカサイ アカサヌ	シジカヤイ シジカナティ	ダイガクシーヤイ ダイガクシーナティ
	仮定	アカサレー アカサラー アカサイネー	シジカヤレー シジカヤラー シジカヤイネー	ダイガクシーヤレー ダイガクシーヤラー ダイガクシーヤイネー
	理由	アカサクトゥ	シジカヤクトゥ	ダイガクシーヤクトゥ
派 生 類	否定	アカコーネー(ラ)ン	シジカーアラン	ダイガクシーヤアラン
	なる	アカクナイン	シジカナイン	ダイガクシーナイン
	丁寧	アカサイビーン	シジカヤイビーン	ダイガクシーヤイビーン
	のだ	アカサンテー アカサル	シジカヤンテー シジカヤル	ダイガクシーヤンテー ダイガクシーヤル

1. 動詞の活用の特徴

(1)活用型と語類の対応

首里方言の動詞にもとの動詞に<sub>ウ</sub>ン(居る)が下接しており、「居る」の活用と密接に関わっている。また、「テ形」にあたる語形も存在しているため、伝統的に「基本語幹」、「連用語幹」、「音便語幹」に分けて分析する方法が用いられている。本稿では、これらの語幹に母音が付いた「基幹」からどのように語形が作られるのかを中心に述べる。

a 類動詞(五段動詞)「持つ」では、基本語幹/連用語幹/音便語幹が{mut/muc/muQc}と対応する。例えば断定非過去形は、連用基幹ウ段形に語尾ンが付いた「ムチュン」となる。「書く」では{kak/kac/kac}と、連用語幹と音便語幹が同形となるため、ここでは「持つ」で代表させる。また、a類動詞のうち、「イチュン」(行く)、「ツイュン」(言う)、「ウムイン」(思う)、「アン」(有る)などは音韻変化等を経て不規則動詞になっている。

b 類動詞(一段動詞)は、a類動詞にほとんど統合しており、型 r {r/j/t}となる。ただし、b類動詞の中止形は、a類動詞より母音が1音伸びる。

・ユミドゥ スル。(読みぞする〔読むのだ〕。)

・ウキードゥ スル。(起きぞする〔起きるのだ〕。)

「見る」は音韻変化と類推により「ン(ー)」で始まる語幹{N(R)d/N(R)z/ N(R)z}となっている。ただし、「見る」の中止形には「ミー」も併用される。これは「ミーン」(見る)系統と「ン(ー)ジュン」系統が併用されているためであるが、現代の首里方言では「ミーン」をことわざなど、やや古い表現として用いることが多く、おもに「ン(ー)ジュン」を使用する。

「来る」は、型 k{k/c/(Q)c}と型 c{kuR}とが併存する。後者は仮定形の「クーレー」などに現れる。「来る」の意志形、命令形の「クー」は、力変の命令形「こ」にあたる。

「する」は型 s{s/s/(Q)s}の活用型を持つ。「する」の断定非過去形はかつて「シュン」であったが(国立国語研究所 1963) 現在ではほとんどが「スン」である。ごく希に[s]と[ʃ]の中間的な音で発音する話者もいるが、一般的な発音ではない。

(2)各活用形の特徴

〈断定非過去形・連体非過去形〉

非過去形は断定を表す語尾「～ン」と連体修飾に

用いられる語尾「～ル」で区別される。どちらも連用語幹の基幹ウ段形に付く。

- ・クヌ フディサーニ カチュン。(この筆で書く。)
- ・ヌーガナ カチュル ムノー ネーラニ。(何か書くものは無いか。)

なお、首里方言の断定非過去形は現在だけでなく、未来も表すことができる。

- ・チューヤ フィマヤクトウ ナーファンカイ イチュン。(今日は暇だから那覇に行く。)

〈断定過去形・連体過去形〉

音便基幹ア段に「ン」が後接した形を用いる。断定過去形だと「ムッチャン」だが、連体過去形では「ムッチャル」になる。

- ・ハナ ウシチツチャル トウジ(鼻を切った妻)(夫のため)

また、首里方言の過去形には、通常の過去を表すもの(第1過去形「ムッチャン」)、話し手が知覚したこと、話し手の眼前で起きたことを表すもの(第2過去形「ムチュタン」)で区別している。

なお、現在の沖縄の人々は、共通語を用いていても第1過去形を「～した」、第2過去形を「～しよつた」で区別している(=「気づかない方言」)。

- ・チヌー テレビ ンーチャン。(昨日、テレビを見た。)
- ・A:アレー マーンカイ イチユタガ?(彼はどこに行きよつたか〔行ったの〕?)
- B:ナマサチ ケーイタシエー。(さっき、帰りよつたさ〔帰ったさ〕。)

〈命令形〉

a 類動詞「持つ」、b 類動詞「見る」、「する」の命令形は2種類ある。基本語幹の基幹工段長音の語形は同輩・目下への命令である。基幹イ段の命令は、通常は「～ヨー」を下接させ、家族間などで年長者から年少者への命令で用いられる。「来る」の命令形「来い」は、「クーヨー」のほか、「クーワ」が用いられている。これは命令の附属形式\*/ba/(久米島方言などでは命令形に「バ」を付すのが優勢)が弱まり、/wa/になったものであるが、かなり待遇度が低く、話し手と聞き手との間に年齢差がある場合や聞き手が目下である場合に用いられる。

- ・トー、ソーミン イリレー。(はい、素麺を入

れて。)(入門)

- ・フェーク ケーティクヨー。(早く帰ってこいよ。)
- ・クマンカイ クーワ。(ここに来い。)

〈禁止形〉

基本語幹の基幹ウ段に「ナ」が後接した形が用いられ、強い禁止「～するな」を表す。なお、「取る」「乗る」「起きる」「受ける」「蹴る」などの禁止形は「～ルナ」が同化により「～ンナ」に変化する。

また、基幹ア段に「ンケー」を後接させた形だと弱い禁止になり、「～しないでおけ」となる。

- ・クマ ッウテー アシブナ。(ここでは遊ぶな。)
- ・クルマンカイエー ヌンナ。(車には乗るな。)
- ・クマンカイエー カカンケー。(ここには書くな。)

〈意志形〉

基本語幹の基幹ア段が「意志」を表す。これは、いわゆる「未然形」に対応する語形である。通時的には意志を示す「む」\*/mu/が付いていたが脱落した語形と考えられる。なお、この語形は意志の他に勧誘表現も表し、「～ナ」「～ニ」が後接することある。

- ・アンシエー、ワンネー ケーライー。(それじゃ、私は帰るね。)
- ・ジルターヤーンカイ アシピーガ イカニ。(次郎の家に遊びに行かないか。)(入門)
- ・クヌ タイオンケーサーニ ハカティンーダ。(この体温計で計ってみよう。)

〈推量形〉

連用語幹の基幹ウ段に「ル」が付き、さらに「ハジ」(はず)が後接したものが推量形である。首里方言では現在80歳以上の高齢者には「～ル=ハジ」と「～ラ=ハジ」の区別がみられる。「～ル=ハジ」は現代日本語の「はず」のように、「当然のこと」「道理」が元になり、「きっと～だろう」の意味を表すこともできる。しかし、「～ラ=ハジ」は、「ハジ」で言い切ることがあり、「もしかすると～かもしれない」のように確信度がやや低い場合に用いられることが多い。

- ・アレー ガッコーッウティ ピンチョーソールハジドー。(彼女は学校で勉強しているはずよ。)
- ・アレー グテーヤクトウ、ウヌアタイエー ムチュラハジ。(彼は力持ちだから、そのくら

いは持つはずよ。)

なお、首里方言には次の文のように、疑問・推量の助詞「が」の「係り結び」によって文末と呼応し、「～なのですか?」の意になる。この問いかけは相手に詰問せず、やや推し量った柔らかな尋ね文になる。都市部の首里では、人間関係が複雑であった(身分が上で年下、身分が下で年上という関係もあった)。また、首里の人の気質を表して他の地域からは「スエー スリーズリー」(首里は揃い揃って〔何をするのも周囲に気を配る])と表現されることと、この「ガ」の係り結びを使った質問文が多用されていることとは何らかの関係があると思われる。

・ッンモー チャーガ ヤイピーラ。(蕃薯は如何でございます〔芋の生育は如何でございますか]) (沖縄対話)

ただし、首里でも 70 代の話者の多くは上記の係り結び「ガ」を用いた疑問文をあまり使用せず、以下のように文末に「ガ」を用いた疑問文の頻度が多くなってきている。話者の高齢化により、係り結び「ガ」を用いた疑問文は使用頻度が下がっていくことが予想される。

・ッンモー チャー ヤイピーガ。(芋(の生育)は如何ですか。)

この疑問文は話し手の疑問をストレートに聞き手へと伝える文ため、上記のような「推量」の要素がみられない。

〈強調形〉

連体非過去形と同じ語形を終止法で用いるのが「強調形」である。主に係助詞「ドゥ」との呼応によって「強調」の文になる。このとき、文全体が強調構文になるが、特に「ドゥ」の直前が焦点化される(例文では「大根ばかり」がフォーカスされる)。

・ペークーヤ デークニピケーンドゥ カマビタル。(ペークー 人名 は大根ばかり(ぞ)食べました。)(入門)

上の例では「ドゥ」の直後に述部が続いているが、必須条件ではなく、以下のような例もみられる。

・アンヤティドゥ チカグル ムジクイディ キラスル ッチュヌチャーヤ グルクニン ミーネーニシャクアマイン フカク ウチケー サピール。(其れ故 近頃 農業に功者のひとは 五六年目には 二尺余も深く墾反

す様に致します。)(沖縄対話)

よって、活用表では係りにあたる助詞を〔 〕でくくって示す。

〈疑問形〉

連用語幹の基幹ウ段に「ミ」が後接した形を用いると単独で Yes/No 疑問形になる。ただし、文に疑問詞が含まれている場合は、「ミ」ではなく「ガ」が後接し、疑問詞疑問文になる。

・イチュミ。(お帰りですか〔行くか]) (あいさつ)

・マーンカイ イチュガ。(どこに行くのか。)

〈過去疑問(確認)形〉

なお、音便語幹の基幹イ段長音(「テ形」の母音を伸ばした語形)を用いると過去の動作の確認ができる。すでに終えた動作について「確認」する際に使用する。

・ガッコーヤ ナー ウワティ。(学校はもう終わったの。)(入門)

〈中止形〉

首里方言の中止形は 3 種類あり、よく使用されるのは「ムッチ」など連用語幹の基幹イ段形「テ形」に対応)で、つぎに「ムチャーニ」など連用語幹の基幹ア段長音に「ニ」が付いた形、まれに「ムチ」などいわゆる連用形に対応する形も用いられる。

はその前の文と後ろの文の間に意味的な切れ目が生じる場合にも、複合動詞を作る際にも使用される。また、は前件が継起となり、後件が生じる(内容的に連続性がある)場合に用いられる。また、は、前件と後件の文を並べ立てる場合に用いられることが多い。

・ウヌ アサー ナー アサカラ ウソージ ッウガディ マタ ウカジャイチキ ッシ... (その朝はもう朝からお掃除奉って またお飾りつけて...)(旧正月)

・アンシ ウンジョー ボージャーヌ イーリムノー コーティ ッメンソーチタイ。(それであなたは坊やおもちゃは買っていましたか。)(あいさつ)

・ユディティヌアトウ、ソーキンカイ アギヤニニ、シル トウバシエー(茹でて後、ざるにあげて、水分を飛ばせ。)(入門)

・ウンドンッシ、ピンチョーンスン。(運動も

して、勉強もする。)

〈仮定形〉

基本語幹の基幹工段長音でまだ起きていない主節の仮定的な因果関係を示す。一方、基本語幹の基幹ア段長音では条件節で仮説を示し、主節で強い希求を示す。また、連用語幹の基幹イ段に「ネー」が後接した形では、上記二つの仮定形を包括した仮定形であり、どの仮定文でも使用可能である。そのため、頻度が最も高い。

- ・タトゥレー、デート リューニ ユビ ッン  
ジャサーニ、ホーセキソーナ ムン ウイル  
ケースヌ イッペー ウフク ナティ  
チョール... (例えると、デートを理由に呼び出して、宝石のような物を売るケースが大変多くなってきている...)(しまくとぅば)
- ・クヌ スムチ ユメニ、アチャヌ シケノームル ワカイサ。(この本を読むと、明日の試験は全部わかるよ。)
- ・アミ フラニ、ウンドークワイエー ヌンナトウイヤミナインドー。(雨が降ったら、運動会は中止になるぞ。)
- ・アミヌ ファイネニ、アレームノー カーラカン。(雨が降ると、洗濯物は乾かない。)

〈理由形〉

連用語幹の基幹ウ段に「クトゥ」が後接した形が用いられる。

- ・シグ ムドゥティチュークトゥ、クマンカイ  
マツョーティ キイレ。(すぐもどってくるから、ここで待っていてくれ。)

〈否定形〉

a類動詞、b類動詞、「する」は基本語幹の基幹ア段に「ン」を後接した形が用いられる。なお、「来る」は「来(こ)ぬ」に由来する語形になる。

- ・チューヤ スムチェー ユマン。(今日は本は読まない。)
- ・ナーダ ターン クーンシガ、アチマイエー  
アチャ ヤタガヤー。(まだ誰も来ないけど、集まりは明日だったかな。)

〈丁寧形〉

連用語幹の基幹ア段に「ビーン」が後接した形が用いられている。

- ・アマクマ ユージヌ アイピータシガ、クマカ

ラ サチニ チャーピタン。(あちこちに用事がありました、ここから先に来ました。)

〈使役形〉

基本語幹の基幹ア段に「スン」(~せる)が後接した形が用いられる。「する」は「スン」が後接できないため、別語形の「シミーン」に置き換えて用いられる。なお、「する」以外の動詞に「スン」ではなく「シミーン」が後接すると、許可・放任などの意味で用いられる。この場合、その行為を行うか否かを相手に委ねている。

- ・ウットウンカイ スムチ ユマスン。(弟に本を読ませる。)
- ・ソージ シミーン。(掃除させる。)(辞書)
- ・アリガ マシャシ トゥラシミレー。(あいつが好きなのを取らせる。)

〈可能形〉

能力可能と状況可能の形式の区別があり、連用語幹の基幹イ段に「ユースン」が後接すると能力可能を表し、基本語幹の基幹ア段に「リーン」が後接すると状況可能を表す。

- ・ウッサ ヤレー ムチユースサ。(それだけなら持てるよ。)
- ・クマー デンキヌ チョークトウ ユマリ  
ーンドー。(ここは電気がついているから〔明るいので〕読めるぞ。)

〈尊敬形〉

連用語幹の基幹イ段に「ミシェーン」が後接した形が用いられる。また、「ミシェーン」の代わりに「ミシェービーン」が用いられると尊敬+丁寧で待遇があがる

- ・タンメーガ シンブン ユミミシェータン。  
(おじいさんが新聞をお読みになった。)
- ・ウブン ウサガティヌアトウ ヌミミシェー  
ビレー。(ご飯を召し上がった後お飲みになってください。)(入門)

首里方言にも日本語と同様に尊敬語専用の動詞がある。例えば、「ソージュン」(見る)の尊敬語は「ウミカキミシェーン」(御覧になる)、「チューン」(来る)の尊敬語は「ッメンシェーン」(いらっしゃる)などを用いる。なお、「ッメンシェーン」には、「イメーン」「メンシェーン」「ウウェンシェーン」などの異形があり、さらに古い語形である「イメンシェ

ーン」が使用されることもある。

- ・アマナカイ アヤビークトゥ ウミカキティ クイミシェービリ。(あちらにございますから、御覧になってください。)(辞典)
- ・ハチウウガミンカイ メンシェール ウチャクヌチャー、ククルクミティ ウマチソーン ディヌクトゥヤイビーン。(初詣にいらっしゃるお客達を心を込めてお待ちしているとのことです。)(しまくとぅば)

〈継続形〉

首里方言では動作の継続と動作の結果を区別している。音便語幹の基幹才段長音に「ン」が後接した形は動作の継続を表している。また、基幹工段長音に「ン」を後接させると、動作結果を表す。

- ・ナマ ユドーイビーン。(今、読んでおります。)
- ・ハニジヌ フウケー パノラマフーニ ヌトウミテール サシンヌチャー ヤイビーン。(羽地の風景をパノラマ風に纏めてある写真の類です。)(しまくとぅば)

〈希望形〉

連用語幹の基幹イ段に「ブサン」が後接した形を用いる。「ブサン」は「フサン」(欲しい)に由来している。

- ・ワンネー ハワインカイ イチブサン。(私はハワイに行きたい。)

〈のだ形〉

首里方言に「のだ」と全く同じ機能のものは該当しないと思われる。それは断定非過去形の成立とも関わるが、断定を示す語尾「ン」に、すでに「のだ」に近い働きがあると考えられるからである。ただ、以下のものは「のだ」のそれぞれの役割に相当するものであるので、ここで挙げる。

断定非過去形に「テー」が後接すると「のだよ」の意となる。

- ・クングトウツシ、ムチュンテー。(このようなふうにして、持つんだよ。)
- ・ッヤーガ カチュンテー。ターン カチュースシェー ウランドー。(お前が書くんだよ。誰も書けるのはいないぞ。)

首里方言には「係り結び」があり、文中に「ドウ」があると、通常述部は連体修飾の語尾「ル」で文を止める(詳しくは名詞述語文 強調形 を参照)。断

定非過去形(終助詞「ドー」が付くことが多い)あるいは上記の「テー」などで結ぶ。

- ・アリガドウ ユムンドー。(彼が(ぞ)読むぞ。)
- ・ッヤーガドウ カチュンテー。(お前が(ぞ)書くんだよ。)

なお、次の例のように、動詞の連用基幹イ段形に「ドウ」がつき、「する」の連体非過去形が続くこともある。この場合、述部が連体修飾の語尾「ル」で結ぶ「強調形」とは違うものである。動詞の連用基幹イ段に「ドウ」が後接した形に「スル」を挿入することで、特に文末の述部を「強調」する「係り結び」になる。これにより、「のだ」に近い表現になる。

- ・クレー ターガン ユマンドー。アリガ ユミドウ スル。(これは誰も読まないぞ。彼が読むんだ。)

## 2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

【形容詞】

〈断定非過去形・連体非過去形〉

「語幹-サ」に断定の語尾「ン」を後接させた形が断定非過去形、連体修飾の語尾「ル」を後接させた形が連体非過去形である。

- ・チューヤ イッペー フィーサンドー。(今日はとても寒いよ。)
- ・マギサル ムヌヌ アマナイクマナイッシ ナガリティ チャーピタン。(大きな桃が右に行ったり、左に行ったりして流れてきました。)

なお、断定非過去形では、「ク活用」と「シク活用」の区別を失っているが、連体非過去と後に述べる「ない形」などでは「シク活用」にあたる形容詞独特の語形も持っている(ク活用と同じ「~サル」も使用可能だが、劣勢)。連体非過去形の場合は、語幹に「シー」が後接した形になる。

- ・ミジラシー クトゥ ヤサ。(珍しいことだよ。)

〈断定過去形・連体過去形〉

「語幹-サ」に「タン」が後接した形が断定過去形、「タル」が後接した形が連体過去形である。

- ・クヌ バサナイエー イッペー マーサタン。(このバナナはとてもおいしかった。)
- ・ウヌ カーテノー イッペー シルサタシガ、ナマー ユグリトクトゥ アラランダレー



ナランサ。(そのカーテンはとても白かったけど、今は汚れてしまっているので洗わないといけないね。)

〈推量形〉

動詞と同様に断定形に「ハジ」が後接して推量の意を表す。また、疑問・推量の「ガ」を用いた「係り結び」により、「語幹-サ」に「ラ」または「ル」が後接した形を用いて推量を表す文になり、主節には「ワカラン」(分からない)が続く場合が多くみられる(チカサラで中止することも可能)。

- ・アマー イPPER フィーサルハジドー。(あそこはとても寒いだろうよ。)
- ・マーガ チカサラ、ワカラン シガ。(どこが近いのか、分からないけど。)

〈強調形〉

「語幹-サ」に「ル」を付けた連用修飾に用いるのと同形で「強調」の意を表す。このとき、「強調」の「係り結び」「ドウ」が文にある場合は、その前に焦点が当てられる。

- ・アマガドウ チカサル。(あそこが(ぞ)近い。)

〈中止形〉

「語幹-サ」に「イ」が後接した形で文を中止することができる。特に複文で用いられる。

- ・アマー アツチョール ッチュン ウフサイ、クルマン ウフサクトウ イチブシコーネー。(あそこは歩いている人も多く、車も多いから行きたくない。)

また、従属節に原因や理由、主節に起こりうる事態の契機になる出来事が含まれる場合、「語幹-サ」に「ヌ」が後接した形になる。また、日常会話では、主節となる文(後件)が省略され、言い切ることができる。

- ・クルマヌ ウフサヌ、ワタララン。(車が多くて渡れない。)
- ・サーターヌ アマサヌ...〔ナー カマラン〕。(砂糖が甘くて...〔もう食べられない。〕)

〈仮定形〉

「語幹-サ」に「レー」や「ラー」が後接した形と「イネー」が後接した形が用いられる。

- ・フィーサレー、マフラーン コーランダレー ナランドー。(寒いなら、マフラーも買わないとならないぞ。)

・マギサラー コータシガ、グマサクトウ コーラントン。(大きかったら買ったけど、小さいから買わなかった。)

・ワーガ ワカサイネー フジサンヤティンヌブイシガ。(私が若ければ、富士山でも登ったのに。)

〈理由形〉

「語幹-サ」に「クトウ」が後接した形が用いられる。

- ・イフェー ナガサクトウ、チツクイミシェービリ。(少し長いから、切ってください。)

〈否定形〉

語幹に「コー=ネー(ラン)」が後接した形を用いる。「~コー」は「~くは」が変化したものである。

- ・クヌ カマブコー アンスカ アカコーネーランドー。(この蒲鉾はあまり赤くないよ。)

〈なる形〉

「ナイン(なる)」は「語幹-ク」に付くことができる。

- ・サーター イリーネー、アマク ナイサ。(砂糖を入れたら、甘くなるよ。)

〈丁寧形〉

「語幹-サ」に「イピーン」が後接した形が用いられる。

- ・イPPER ウツサイピーン。(とても嬉しいです。)

〈のだ形〉

動詞と同様に断定非過去形に「テー」が後接した形が用いられる。

- ・クレー イPPER マーサンテー。(これはとてもおいしいんだよ。)
- ・ウリガドウ イPPER マーサンテー。(それが(ぞ)とてもおいしんだよ。)

文末を「語幹+サ」に「ル」の語尾が後接した形(連体非過去形と同形)で結ぶことで「強調」される(いわゆる「連体止め」に相当)。

- ・アンシ マギサル。(なんて大きいんだ。)

【形容名詞述語・名詞述語】

〈断定非過去形・連体非過去形〉

形容名詞述語、名詞述語とも断定非過去形は「ヤン」の語尾を用いる。

なお、連体非過去形において、形容名詞述語では、「ナ」の形が用いられる。

・デージナ クトウドー。(大変なことだぞ。)

また、名詞述語の連体非過去形も「大学生である人」ではなく、「大学生の皆さん」のように助詞「の」にあたる「ガ」や「ヌ」が用いられる。

・アリガ スムチ(彼の本)(辞典)

・シンシーヌ クルマ(先生の車)

〈断定過去形・連体過去形〉

形容名詞述語・名詞述語の断定過去形では「ヤタン」が、連体過去形では「ヤタル」が使用される。

・ワンネー ジューニンメーマデー サンシノ  
ー ジョージ ヤタシガ、トウシ トウヤー  
ニ、ナマー フィチューサン。(私は十年前  
までは三線は上手だったけど、年を取って今  
は弾けない。)

・アヌッチョー セイジカ ヤタンドー。(あの  
人は政治家だったよ。)

〈推量形〉

形容名詞述語・名詞述語とも「ヤル」に「ハジ」が後接し、推量の意となる。

・アリアレー ジョージヤルハジ。(彼なら上手  
だろう。)

・アマー マックールー ソークトゥ、アミフ  
イ ヤルハジドー。(あそこは真っ黒くしてい  
るから雨降りだろうよ。)

〈強調形〉

形容名詞述語・名詞述語とも「ドウ」と「ヤル」が呼応し、「強調」の「係り結び」となり、文全体が強調の構文になるが、特に「ドウ」の直前の「上手」や「御同様(同じ物)」が強調される。

・アレー ッウドウイン ジョージドウ ヤル。  
(彼は踊りも上手なのだ。)(入門)

・アンシェー ィイヌムドゥ ヤル。(それで  
は御同様で ござります。)(沖縄対話)

なお、以下のように「ヤル」に疑問を表す「イ」が後接し、強調の疑問文になる例もみられる。

・フカク ウチケースンディ ツユシェー ン  
ー チャヌ スクマディ ウチケースル ク  
トゥドウ ヤイピールイ。(墾方を深くする  
と申せば つちぞこ 壤底まで すきかえ 鋤反すことで ござり  
ますか。)(沖縄対話)

〈中止形〉

形容名詞述語、名詞述語とも「ナティ」が後接し、中止形となる。

・アレー サンシヌン ジョージヤイ、テー  
クン ジョージヤイ、ッウドウイン ジョー  
ジヤンドー。(彼は三線も上手で、太鼓も上  
手で、踊りも上手だ。)

・チューヤ ニチヨーピヤイ、マチリン アイ、  
チュヌ マンドークトゥ、イチブシコーネー  
ン。(今日は日曜日で、祭りもあり、人が多  
いので行きたくない。)

〈仮定形〉

形容名詞述語、名詞述語ともに「ヤレー」「ヤラ  
ー」「ヤイナー」が後接する。

・ナー イフェー シジカヤレー マシヤルム  
ンヌ。(もう少し静かならよいの。)

・ムシカ ウチューヒコーシヤレー クーチュ  
ーユーエイン ナタラ ハジヤー。(もし宇  
宙飛行士であれば、空中遊泳もできたはず  
ね。)

・ジノー ムッチョークトゥ、コーイムンヤラ  
ニ ナイシガ、ハル ウチュシェー ナラン。  
(お金は持っているから、買い物だったらで  
きるけど、畑を耕すのはできない。)

・ジョージヤイナー、サンシン フィチ トゥ  
ラスシガ、フィチューサン。(上手ならば、  
三線を弾いてやるけど、弾けない。)

〈理由形〉

形容名詞述語、名詞述語ともに「ヤ」に「クトゥ」が後接する。動作が継続している場合は、「ヤ」ではなく、「ナトー」に「クトゥ」が後接する。

・クレー ッウドウイヌ ジョージヤクトゥ、  
ヌーガナ ッウドウラシェー。(彼女は踊りが  
上手なので何か踊らせる。)

・ワンネー ウンテンシュヤクトゥ、サケー ヌ  
マランドー。(私は運転手だから、酒は飲めな  
いぞ。)

・ウーカジナトークトゥ タイクサイエー  
トゥイヤミニ ナイサ。(台風になっている  
から、体育際は中止になるよ。)

〈否定形〉

形容名詞述語、名詞述語ともに「ヤ」(は) + 「ア

ラン) (ない) が後接した形が用いられる。

・アレー サンシノー ジョージェーアランドー。  
(彼は三線は上手ではないぞ。)

・クレー デークネーアラニ。(これは大根  
じゃないか。)(入門)

なお、次の例文は否定形「アラン」に「ダアレー」  
が後接した形で条件文になる。

・デーシチアランダレー、シティティン シメ  
ーサニ。(大切でないなら、捨ててもよいだ  
ろう。)

〈なる形〉

形容名詞述語は「ナイン」(なる) が後接した形  
が用いられる。なお、名詞述語の場合は格助詞「ン  
カイ」が用いられることもある。

・ワカサクトウ チューチャン ジョージナイ  
ザ。(若いから、すぐに上手になるよ。)

・クレー ウンドーヌ ジョージヤクトウ、オ  
リンピックセンシュンカイ ナインドー。  
(彼は運動が上手だからオリンピック選手  
になるよ。)

・ワンナー シンシーンカイ ナレーヤーン  
ディ ウムトーイビーン。(私は先生になり  
たいと思っています。)

〈丁寧形〉

形容名詞述語、名詞述語ともに「ヤイビーン」(で  
す) が後接した形が用いられる。

・イッペー ガンジューヤイビーン。(とても  
元気です。)

・アチャー シュッコービ ヤイビーン。(明日  
は出校日です。)

〈のだ形〉

形容名詞述語、名詞述語ともに「ヤンテー」(な  
んだよ) が後接した形が用いられる。

・ソロバノー アリガ ジョージヤンテー。(そ  
ろばんは彼が上手なんだよ。)

・アリトゥ クリトー イチュク ヤンテー。  
(あいつとこいつは従兄弟なんだよ。)

用例出典

沖縄の方言：井上史雄・吉岡泰夫・内間直仁[監修]，  
かりまたしげひさ・仲原穰・中本謙・西岡敏[著]  
(2004)『沖縄の方言 調べてみよう暮らしのこ

とば』ゆまに書房

しまくとぅば：伊狩典子・広田貴代子(1998)『しま  
くとぅば』自家出版(発行者：伊狩典子・広田貴  
代子)

夫のため：国立国語研究所 編(1999 [1963])『夫の  
ために鼻を切った女の話』『沖縄語辞典』大蔵省  
印刷局

あいさつ：日本放送協会(1972)『あいさつ』『全国  
方言資料 10 琉球編』日本放送出版協会

旧正月：比嘉成子(1987)『首里方言自由会話』『旧正  
月と大晦日の思い出』琉球方言研究クラブ 30 周  
年記念会 編『琉球方言論叢』琉球方言論叢刊行  
委員会

辞典：国立国語研究所 編(1999 [1963])『沖縄語辞  
典』大蔵省印刷局

沖縄対話：仲原穰・仲里政子・新垣恒成・国吉朝政  
(2014)『現代首里方言訳』『沖縄対話』(3) 「第  
三章 農之部」 『沖縄芸術の科学 第 25 号』  
沖縄県立芸術大学附属研究所

入門：西岡敏・仲原穰[著]、伊狩典子・中島由美[協  
力](2006[2000])『沖縄語の入門(CD 付改訂版)  
たのしいウチナーグチ』白水社

参考文献

上村幸雄・須山名保子(1997 [1992])『奄美方言』  
亀井孝・河野六郎・千野栄一編[著]『言語学大辞  
典セレクション』(『言語学大辞典 第 4 巻 世界言  
語編(下-2)』)三省堂

内間直仁(1984)『琉球方言文法の研究』笠間書院  
国立国語研究所(1963)『沖縄語辞典』大蔵省印刷局

津波古敏子(1997[1992])『沖縄中南部方言』亀井孝・  
河野六郎・千野栄一編[著]『言語学大辞典セレク  
ション』(『言語学大辞典 第 4 巻 世界言語編(下  
-2)』)三省堂

名護市史編さん委員会・名護市史『言語』編専門部  
会[編](2006)『名護市史本編・10 言語』名護  
市役所

西岡敏・仲原穰[著]、伊狩典子・中島由美[協力]  
(2006[2000])『沖縄語の入門(CD 付改訂版) た  
のしいウチナーグチ』白水社

(仲原穰)